

川崎市川崎区市民提案型協働事業審査委員会 (令和6年度いきいき提案事業報告会) 摘録

日時：令和7年2月5日（水）9時～12時

場所：川崎区役所12階第1・2会議室

出席者（敬称略）

委員：佐谷和江委員長、石井芳和委員、長田英史委員、鈴木奈穂美委員

実施団体：社会福祉法人青丘社、株式会社 EMISORA、NPO 法人姿勢教育の孝心会、小田まちづくりクラブ、川崎あそび宿、株式会社まつ乃家

所管課：企画課、地域振興課、地域ケア推進課、地域支援課、保育所等・地域連携担当
事務局：企画課

傍聴：16名

1 開会

- ・事務局から、資料確認、会議の成立を確認

2 令和6年度提案事業の評価

(1) 委員会の運営について

- ・事務局から、会議の運営方法を確認

(2) 進行方法について

- ・事務局から、進行方法などについて説明

(3) 実施団体による事業報告（10分／団体）

報告1	外国につながる高校生・若者が集い、共生を目指す場の創出
実施団体	社会福祉法人青丘社（若者グループ・リッドゾーンも出席）
所管課	企画課、地域ケア推進課

質疑等

佐谷委員 3年目ということで、提案事業としては終了となるが、これからこの事業を続けていく中で、行政にはどのようなサポートをして欲しいと考えているか。この3年間で見てきたことはあるか。

実施団体 講座などを行う場所の確保の際に、区役所が支援してくれたことは大きかったと思う。また、後輩への相談活動について、はじめは夏休みに教育文化会で行なったが、バイトや遊びに行ってしまう人が集まらなかったのが、自分たちが出向いてはどうかということになった。出前相談を学校側へ提案する際、公的事業と連携しているということで信用度は高くなったと思う。学校と地域

との連携は大きなテーマだが、なかなか実現しているケースは少ない。今回は新たな事業として実現できた。

大学に行くのは経済的に難しいが、産業技術短期大学を卒業して、IT 産業に正規就職した先輩もあり、そういったところを公的事業として連携することは重要だと思う。

- 佐谷委員 この点について、所管課は今後の可能性などの考えはあるか。
- 所管課 来年度の予算はまだ確定していないが、来年度から地域課題対応事業として、行方方向で調整である。もともと区役所と青丘社で学習支援の事業を行っており、高校への進学は一定程度高まっているが、その後のキャリア支援につながりにくいという課題があった。この学習支援の延長として、学校への出前相談や相談会を協働でやっていきたいと思っている。
- 鈴木委員 今回は中学生も対象にしているが、中学生の反応や高校やその先のキャリアにつなげることについて、どのように考えているか。
- 実施団体 日本人の中学生でも将来何をしたいのかイメージしにくいと思うが、外国籍や外国につながる中学生は更に将来のことを考えにくい。
- 成功した先輩たちを実際に見せることで、将来のイメージを示すことが大事。後輩たちと接する限り、日本語が上達しない子が多いが、理由は勉強する意識がわいてこないこと。先輩たちと話し、こういう先輩たちがいるんだと思ってもらうことが大事だと思う。中学生にとっては夢を持たせることが大事。
- 鈴木委員 中学生の時から日本語を勉強することは大事で、そのきっかけとしてキャリアを示してあげることが重要だということが良くわかりました。
- 長田委員 団体同士が一緒にやるということは様々な課題もあると思うが、報告を聞いていると、充実した 3 年間だったと思う。こういったところが上手くいったポイントになったと考えているか。
- 実施団体 青丘者で外国にルーツの若者の支援に携わっている人たちは、私のような職員や県立川崎高校の元職員、識字学級をやっていた人等が非常勤として働いている。その他に私たちと同世代の市民ボランティアがいる。そういった人たちの中で、これからどうやって世代を繋いでいくかということが大きな課題だった。キャリア支援の中で、まずはモチベーションを持たないとやる気にならないということは現場の中で感じており、若者と一緒に活動をしていると元気がもらえる。若者たちにとっても、私たちの経験値は役立つ部分もあると思う。活動しながら交流をすることは楽しい。そういう形では協働も芽が出てきたのではないかと思う。

実施団体（若者グループ）若い団体なので、活動するにも経験がないので、牽引してくれる存在がないとどこに向かっていけば良いかわからない。その方向性を示し

てもらえたことは助かった。この３年間は我々の団体にとって良い経験になった。

傍聴団体 上手くいくケースと上手くいかないケースがあったと思うが、この３年間で上手くキャリアが形成できたケースは、何が秘訣だったと思うか。

実施団体 県立高校の中に多文化教育コーディネーターというシステムがあって、そこに青丘社の職員が元々週一回程度行っていたが、そこで出会った高校生には、在留資格が家族滞在で、年収３００万円くらいで生活している家族もたくさんいて、将来になかなか夢を持てなかったと思う。その生徒たちと若者グループとの出会いの場を作っていく中で、やる気が出てきて、最初は全然日本語の勉強をしなかった人たちが、正規就労を果たすなどしている。オンラインではなく、実際に出会える場を作ることによってネットワークを広げていくことが大事だと思う。そこから先は若者たちは SNS などのやり取りで個別の相談もできる。

キャリア支援は１年、２年で終わるのではなく、地域活動の強みとして１０年のスパンで考えていくことが重要だと考えている。

石井委員 川崎区には多くの外国につながる若者がいて、その教育や進路、キャリア支援は区としても大きな課題だと認識している。これまでも青丘社は若者支援をやってきているが、今回提案事業として、このような活動をやってもらった。その中で、居場所づくり、相談できる場、支え合える場がしっかりできてきたことは大きな成果だと思う。

報告書を見て、こんなに就職率が低いのかと驚いた。それを踏まえても今回の事業はしっかりとした成果が出ているので、引き続き取り組みを続けていく欲しい。区役所としてもサポートしていければと思う。

報告 2	らしく Ru
実施団体	株式会社 EMISORA
所管課	地域ケア推進課、地域支援課、保育所等・地域連携担当

質疑等

石井委員 講座を有料化したことで、連絡なしで欠席する人が減ってきたということだが、以前は欠席する人が相当程度いたのか。

実施団体 集客面で、区とも相談して、有料にすると参加者が集まらないのではないかと、ということで、初年度は無料でイベントを行った。子供なので、当日の体調不良や気分が乗らないなど、前日当日のキャンセルが多かった。無料だと行かなくても良いかという感覚になるが、有料だとちゃんと連絡しようとするのか、当日でもちゃんと連絡をもらえることも多くなった。

鈴木委員 チラシや SNS で集客の成果があったとあるが、どのような効果測定を行なっ

たのか。

実施団体 イベントごとに行なっているアンケートの中で、どこでこのイベントを知ったかという問を入れているので、その結果から。区と協働ということで、保育園や幼稚園にチラシを配布できたのはすごく大きい影響があったと思う。定期的なイベントなので、新規できてもらうことが一番効果がある。また、この回は行けないけど、次の回ならいけるということで、リピーターも増える。前は参加者特典として、先行予約の仕組みを作ったが、そうすると特典を使える人が、全ての講座に予約をしてしまい、新規の人が予約をできない状況となってしまったので、今回は予約の仕組みを変更して、新規の人でも予約ができるようにした。

鈴木委員 集客は大変なので、初年度の反省を踏まえて改良したことは良かったと思う。次に、第1期修了生コラボ企画とあるが、これは昨年度のみらく Ru スクールに参加した支援者の人たちが企画をしたものなのか。

実施団体 その通り。みらく Ru スクール1期生が卒業後に、子育てサロン企画としてコラボしたもの。

鈴木委員 卒業後にそれっきりにならず、実戦の場を作ったのは面白い仕掛けだと思った。

実施団体 ただ学ぶだけでは忘れてしまうので、学び直して、何回もアウトプットすることが、大事だと考えている。また、横のつながりが大事になってくると思う。地域で何かやりたいと思った時に、一人ではなかなか難しいので、このような横のつながりを作り、実践している人とコラボすることで、成功体験が得られ、自信につながる。1期生はすごく仲が良く、独自にコラボをしてイベントをしており、いろいろなつながりができている。そのようなつながりが作れるような仕組み作りができるように、我々も心がけている。

みらく Ru スクールの一番のコンセプトは、今は我々が教える側としているが、最終的には卒業生が講師側になってもらうこと。持続可能な仕組みづくりを重要視している。今、卒業生から運営側に回ってきている人も多くいるので、最終的にはその人が講師になっていく。そのサイクルを川崎区の中で作っていきたい。

長田委員 参加者だった人を主催者側にシフトさせるという、プラットフォーム事業的な面があると思う。技術的なことであれば、習ってある程度習得すれば教える側に回ることにはできると思うが、この事業では、イベントを成立させる土台づくりも含めて参加者と一緒にやっているのか、土台の部分は団体が用意したうえで参加者だった人たちに運営側に回ってもらうのか。どのようなイメージを持ってやっているか。

実施団体 団体側でベースは作っている。しかし、ベースを用意してしまうと、分かった

気になってしまうので、少し悩んでもらって、それを解決する経験を積んでもらえるようにもしている。

所管課 1年目は広報や場所の確保のほか、受付など運営面でも手伝いもさせていただいた1年目は広報や場所の確保のほか、受付など運営面でも手伝いもさせていただいたが、2年目は運営は任せた。イベント当日に、インフルエンザでスタッフが足りないといったこともあったが、横のつながりでしっかり開催していた、運営は安定してきているのではないかと感じている。

長田委員 所管課は相手が株式会社でやりづらかったことはなかったか。NPO法人や任意団体が多いと思うが。

所管課 そのあたりは意識せずにできていたと思う。

長田委員 ビジネスのエネルギーを地域の活動に持ち込んでいるというところが新しいと思う。株式会社という形態だからこそやれることやりづらいことがあったと思う。株式会社だったら営利企業だから金儲けなんじゃないか、NPOやボランティア団体だったら無償でやっている、というような思われかたをされがちな中で、あえて株式会社という形態で先駆的な活動をしているんだと感じた。自治体にも言えることだが、有料か無料かということではなくて、有料に相応のコンテンツをしっかりと準備していて、これはいいなと思ってもらえればリピートに繋がるので、EMISORAには、単に有料か無料かというところを超えた努力があったのだと感じた。また、参加者だった人たちが主催者側に回るということは、大きな展開だと思う。ビジネス的なエネルギーやしっかり数字を挙げてやっていく考え方と、受講生が悩みながらやっていくということを両立させている。こんなやり方もあるんだという文化を育ててもらえればと思う。

報告3	子どもまちびらき大作戦
実施団体	NPO法人姿勢教育の考心会（まちびらき隊も出席）
所管課	企画課

質疑等

石井委員 子供のやりたいという気持ちを大事にしながら、実行に移していくという取り組みは素晴らしいと持っている。また、それをやることで子供の主体性を育み、次のリーダーを生み出していくのだと思う。こういった取り組みを続けていく中で、次のリーダーの候補者は現れてきているのか。

実施団体 代表の他にも大学生や高校生の副代表がいるので、少しずつ育ってきていると思う。

代表は2人いて、それぞれ忙しいのでフレキシブルに動けるようになっている。副代表も4人、さらに副代表候補に自ら立候補してなっている子もいる。

自分からやりたいという子も増えている。

長田委員 子どもの気持ちからアクションに繋げていく筋道の中で、子どもたちの素直な気持ちを拾い上げるためにしている工夫はあるか。

実施団体 子どもの意見を聞く時に、大人である私が動いていなところだと思う。おじさんが聞いても何も言ってくれないが、少し先輩の中学生や高校生が聞くと話しやすくなる。毎週日曜日に公園で活動をしているので、それをやりながらだと子どもたちも素直に意見を言ってくれる。たまに子どもならではの意見も出てくるが、それも面白いと思う。学生もそれをなんとか形にしようと面白いイベントを考えてくれる。

鈴木委員 先ほどの青丘社の報告でも市立川崎高校の話が出てきたが、学校と市民団体が連携するのはハードルが高いと思う。昨年も市立川崎高校と連携していたと思うが、学校の伝統として外に開いていこうという学校なのか。

実施団体 つながるきっかけは、まちびらき隊にいたメンバーが市立川崎高校の生徒だったこと。市立川崎高校の文化祭のために作ったものが、コロナで文化祭が中止になって捨ててしまうという話を聞いて、それをもらってお化け屋敷を作ろうとなったのが始まり。それ以降お化け屋敷をやる時は、市立川崎高校からもらうようになっている。他にも市立川崎高校の生徒がいて、まちびらき大作戦の話を先生にしてくれて、クラスルームで取り上げてもらえることになった。たまたま市立川崎高校の生徒がメンバーだったというだけで、他の高校の生徒がいればその学校と連携をしていたのかなと思う。

鈴木委員 市立川崎高校には今後の地域のリーダーになりそうな若者が複数いそうかどうか。

実施団体 そうだと思う。他の高校生や中学生も巻き込んでいきたいとは思っているが、なかなかハードルが高い。また、大学との連携をしたいと思っているが、川崎区には大学がない。そこが活動の中で難しいと感じているところ。

佐谷委員 2年目ということで、これまでやっていたことに加えて、新規のイベントを3つほどやっていて、さらに毎週活動もあって、少しオーバーワークになっているようにも思うが、その辺りのバランスはどうしていこうと団体の中では議論をしているのか。

実施団体 私も同じように感じていて、何度か大変じゃないか、と聞いてみたり、提案書の作成が大変ならやらなくてもいいと言ったこともあるが、やっていきたいという返事だった。また、複数のイベントがあるが、ひとりが取りまとめるのではなく、各イベントごとに担当を決めて、そこに代表や副代表が入ってサポートをするという形にしている。管理している代表、副代表たちは大変だと思うが、本人たちはやっていきたいということなので、フォローしながら、本当に大変そうなら手を貸そうとは思っている。今のところはそれをしなくても

出来ている。

実施団体（まちびらき隊代表） 大変だと思うこともあるが、まちびらき隊に参加して
いて、楽しいので今後も頑張っけて続けていきたいと考えている。

所管課 若者がやってみて、上の世代がフォローをして、その若者が成長して、次の世
代をフォローする側になるという循環の形が良いと思う。担い手の課題があ
る中で、一つの持続可能なモデルだと思う。区としても「Colors,Future 賞」
に推薦させてもらったが、自分たちでも何か出来る、という成功体験を若いう
ちに積んでもらうことも、これから社会に出ていく中で、大切だと思う。これ
からも継続してやってもらえればと思う。

傍聴団体 我々の団体も学ぶべきところだと感じたのは、上の方の胆力が必要で、見守る
ということがすごく重要だということ。逆に教えすぎてしまうと育たないとい
うところのさじ加減は学ぶべきところだった。とてもいい活動なので、
何かで連携できればと思うし、大人が子どもたちのやる気を引き出して、持続
可能な仕組みをどう作っていくか。大人と子どもの良いサイクルが実現でき
るのではないかと考えて、すごく良い発表だった。

鈴木委員 2年目でいながら、3年目終了後のことも視野に入れて、活動資金を得るよう
な事業を盛り込んだり、小学生の考えを繋ぎ止めるために通信を発行するな
ど、新しい取り組みにチャレンジした年だったのだと思いながら、聞いていた。
自分たちで頑張っけて、楽しくて、やりがいもあつてというのも大切だが、第三
者から評価されるということも継続する源になると思うので、今回、
「Colors,Future 賞」に区が推薦して、受賞したということはとても重みのあ
ることだったと思う。また、大学の授業で講義をするということもなかなか
ない体験だし、そのようなチャレンジの場が今年度増えたということは、これか
ら大いに期待できる活動だと思った。ただ、疲れてしまつては継続ができな
くなってしまつてしまうので、事業を統合したり、隔年にしたりする工夫もあつて良い
と思う。大学で教えていて若者の馬力もよく知っている。若いからこそできる
活動でもあると思うので、大人たちにフォローをしてもらいながら継続でき
ることを期待している。

報告 4	安全安心のまち・小田「防災空地をまなぼう！」
実施団体	小田まちづくりクラブ
所管課	地域振興課

質疑等

長田委員 防災空地に注目した経緯、また、注目したことでの新たな気付きや展開があれば教えて欲しい。

実施団体 防災空地は3年間の期間で土地を提供してくれる地主が必要だが、小田では、

何も使っていないから、と提供してくれる人がいた。普段はなにも使用されていない空き地となっているが、そこが地域の人の憩いの場になってきていると思う。空地を防災の目的で使わなければいけない状況になっていないことは、幸せな事だと思う。

石井委員 こども文化センターと連携をしていきたいという話があったが、具体的に考えていることがあれば、もう少し詳しく聞かせてもらいたい。

実施団体 イベントを行う際は浅田と小田のこども文化センターが協賛してくれ、当日も参加してくれていた。私自身も昔、こども文化センターの職員で、今も運営協議会の代表をしている。地域との交流や地域を巻き込んだイベント等を行うこともこども文化センターの役割の一つであり、地域とコラボしながらイベント等を行うことはこども文化センターとしても意味のあることだと思う。我々の活動は縮小してしまうが、これからはこども文化センターを中心に、防災空地のイベントをやってもらい、私たちが手伝いとして参加する形に出来ればと考えており、館長とも話をしている。

石井委員 こども文化センターで資金的な部分もフォローしてもらえるのか。

実施団体 市民活動センターから運営協議会に、少しだけ資金がきている。また、この3年間で、防災空地でのイベント用に作ったものがあるので、それを使ってもらうことで、経費のかからないイベントが出来ると思う。

鈴木委員 防災空地は地域の人達に防災意識を根付かせるために、良いものだと思う。防災空地は地権者の理解があってこそできるもので、更新はあると思うが、期間は3年間ということだった。地権者の考えが変わってしまえば、防災空地はなくなってしまう。その中で、子どもたちや地域の人達が防災空地に集まって、その意義をしっかりと理解して、必要なんだということを地権者に発信することが必要なのだと感じた。地権者の人達とのコミュニケーションはしているのか。

実施団体 防災空地に土地を提供している地権者の多くが、小田地区にある町会の町会長なので、今ある防災空地に関しては連携が取れている。

鈴木委員 小田に住んでいる人であれば防災空地の重要性を理解していると思うが、相続などで代替わりすると、駐車場などの別のニーズもあり、今後、維持していくのは大変だと思うので、この活動を継続して、維持できれば良いと思う。

佐谷委員 今後団体としては、防災に特化していくのか、他の事も含め幅広く活動を継続していくのか、どのように考えているか。

実施団体 この3年間は防災に特化していたが、それまでの30年は、まちを良くしようとか子どもたちの遊びの場の提供などをやってきた。この事業を始めるまで私たち自身も防災空地を知らなかった。小田地区の各町会でも防災訓練などをやっているの、この3年間で学んだことは、各町会にも根付かせていって、

一緒にやっていきたい。今後は各町会を中心とした活動に移行していければと考えている。

石井委員 防災空地が地域にあまり知られていないという所に注目したのは、良い事だったと思う。この３年間で多くの人に防災空地の存在や防災の知識を広めることができたのではないかなと思う。また、防災を考えるにあたり、地域のつながりが非常に大事になるが、イベントを通じて、つながりづくりができたところも評価できると思う。小田公園での花植えもつながりづくりの１つだと思うので、引き続きそういった活動にも力を入れてもらい、災害が発生した時に、皆で助け合えるまちづくりにつなげてもらえればと思う。

報告 5	川崎あそび宿
実施団体	川崎あそび宿
所管課	地域振興課

質疑等

長田委員 団体としてはどのような人たちが集まっていて、この事業以外にはどのような活動をしているのか。

また、今回の事業はどのような地域課題に、どのようにアプローチしようと考えているのか。

実施団体 メンバーは、東海道川崎宿 2023 が終わって、このまま終わらせても良いのか、と考えるメンバーやその他にも仲間を募って始めた。

川崎を好きでいてもらうために、川崎宿がどんなところだったのかを遊びを通して知ってもらいたいと思っている。今回でいうと、象のペーパークラフト作りをやって、なぜ象なのかという所から、川崎宿に象が来たお話を伝えたり、亀の工作をやって、宗三寺の亀のお話を伝えた。

石井委員 東海道の歴史を子どもたちに伝えていくことは、区としても重要だと考えている。

反省点のところに参加者が予定者数に届かなかったとあるが、どのような広報を行ったのか。

実施団体 小学校を通して児童にチラシが配れなくなり、掲示ならしてもらえということだったので、掲示してもらった。また、区の HP に掲載してもらったり、公共施設や子どもが来そうなカフェにチラシを置いてもらった。

石井委員 幅広い広報をしていくことが重要だと思うので、引き続き工夫して行ってもらえればと思う。

鈴木委員 小学校にチラシが配布できなかったとのことだが、区から学校にお願いは出来なかったのか。

所管課 デジタル化を進める中で、教育委員会事務局の方針として、イベントアプリを

活用して、学校へのチラシの送付は行わないということになった。子どもたちにはタブレットでイベントの情報を見もらう形にシフトしている。

鈴木委員 市の方針ということで、仕方がないことではあるが、子どもや親への連絡がデジタル化してきているなかで、漏れも多い事も事実。アナログ的な機能を持ちながらどのようにデジタル化をしていくのかは、情報を届けることを考えるうえで重要だと思う。デジタルだけで伝える限界もあると思うので、デジタル以外で広報をする方法を所管課と一緒に考えていく必要があると思う。

佐谷委員 団体としては、親子を対象としたイベントを行う団体という認識で良いか。

実施団体 今回は親子を対象に行なった。

佐谷委員 今回は、ということは、大人向けのイベントも行う可能性はあるということか。

実施団体 親子に特化しないやり方も考えながら、今回は1回目と2回目のやり方を変えて実施した。1回目は工作や体験を行い、2回目は、ブースを作って好きなところを周ってもらう形にして、今後大人でも参加できるような形を考えながら実施した。

佐谷委員 次回以降の展望に書いてある、区内フェスとはどのようなイメージか。

実施団体 区内で開催されているお祭りやイベントに参加して、川崎宿をPRしたいと考えている。

所管課 東海道川崎宿2023という団体が市民と行政との共同組織として、20年前に発足し、区役所が事務局を担うことで、区民の要望やアイデアを実現してきた。活動の目標が川崎宿起立400年に向けた取り組みだったので、2023年に起立400年を迎えたことで、団体は解散した。川崎宿の取り組みに思いのある川崎あそび宿の代表が、もっとやれることがあるのではないかと仲間を集めて立ち上げたのが川崎あそび宿。本人の好きを形にして、区役所も広報などでサポートさせてもらった。

2年目については、団体自らも言っているように、参加者数の課題もある。また、保護者を巻き込んでいくことも意識をしてもらえる良いと思う。

東海道かわさき宿交流館については、市のルールの中で管理はしているが、市民の方々からの提案は大切だと考えているので、交流館の使い方について、どんどんアイデアを出していただいて、使い倒してもらえればと思う。

長田委員 たくさん楽しいことをやっているなということと、歴史というコンテンツは好きな人も多いし、川崎は歴史のある地域でもあるので、取り組みの魅力は良く伝わってきた。一方で、どのような人に向けた事業なのかという点では、難しいところもあったと思う。

伝えるということを事業にする場合、講座にしなければいけないとか啓蒙しなければいけないということを考えてしまって、窮屈になってしまうこともあるが、自分の好きなことを形にして、自分もやっていて楽しい、という思い

が溢れていくような展開になっていくと素敵だと感じた。

報告 6	親子で今昔体験 2024
実施団体	株式会社まつ乃家
所管課	地域振興課

質疑等

- 長田委員 参加した人たちの反応はどうだったか。
- 実施団体 アンケートには、稲毛神社の話が聞けてうれしかったと書いてあって、うれしかった。神社仏閣は地域の身近にあるが、なかなか興味関心を引かない。なんとなくお祭りに参加する程度で、神社が存在する意味や価値については子どもは興味がないものと思っていた。子どもからの、もっと話が聞きたいという声をもらって、今回集客は良くなかったが、もっと工夫をして続けていきたいなと思った。芸者を子どもたちに体験させていいものなのか、私は男性で芸者をやっているが、今は LGBTQ などの言葉もあるので、見方が変わればもう少し裾野が広がったのではないか、その辺りの説明が足りなかったのではないかなど、改善する点は多くあると感じている。
- 佐谷委員 伝統芸能を伝えることは重要な事だが、川崎区の事業としては、一連のプログラムの組み立ての中に、川崎色が少し薄いように感じたが、どのように考えているのか。
- 実施団体 その通りだったと思う。今後は川崎区文化協会に協力をしていただいて、川崎で琴やお茶をやっている方で構成して、やっていきたいと考えている。
- 所管課 行政としても芸者の取り組みを応援するということは覚悟のいること。一般的なイメージとして、夜の遊びというイメージを持っている人も多いと思う。川崎宿とともに花街があり、置屋があったという歴史が川崎にはある。そのような、なかなか伝えづらいことでも、実際にやっている方が伝えることで、説得力が出るのではないかと思う。子どもに伝えたいということもあると思うが、川崎に住んでいる人たちに多く伝えてもらうということは、大切な事だと考えている。また、区の文化協会は、活動の発表だけでなく、実際に体験してもらうということも協会の趣旨と聞いているので、文化協会と連携して、文化を身近に感じてもらう内容を入れるのは良いことだと思う。
- 傍聴団体 話を聞いて、やる側と受ける側の印象は違うのだなと感じた。親子を対象としているが、親子が伝統芸能を学ぶ意義、メリットがなかなか伝わりづらい。おじいちゃんおばあちゃんになら刺さるようなら、3世代の交流をキーにして、最終的に親子につなげていくなど、我々としても一緒に出来たら良いと感じた。
- 鈴木委員 芸者を取り扱う難しさの話もあったが、こういったことを理解してこそ、真の

意味での歴史を理解できると思う。川崎宿の400年の歴史の中で、良いところも、子供には伝えづらいこともあると思うが、それを伝えないことで差別が生まれたりする可能性もあるので、しっかり伝えるべきことだと思う。

市民活動は想いをもって活動している人ばかりなので、やりたい事の軸をもって事業を進めている。今回は集客の面で反省があったようだが、参加者が感じとる価値に目を配って、2年目、3年目と継続することで、事業の発展につながると思う。

今回は年齢の高い層には魅力のあるコンテンツだったが、子どもには興味を引く入口がなかなかみつからなかった、と自身でも分析をしているので、次年度はさらに対象を拡大してやっていくとなったのだと思う。

私もお茶を習っていたことがあるが、年齢を問わず小さな時から、座ってゆっくりお茶を飲んだり、お菓子を食することで得られるものもぜひ伝えてもらいたい。舞やお花も同じようにリラックス効果のあるものだと思うし、プロだからこそ伝えることができると思う。

3 閉会

総括講評

佐谷委員

川崎市の「人財」づくりの事業に携わっているが、地域の担い手は素晴らしい「人財」であり、今日集まっていた人たちは素晴らしい「人財」だなと感じた。また、それぞれが事業の中で、人材や担い手を広げていく取り組みも行っていることも素晴らしいことだと思う。

今年度の事業は乳幼児からキャリアを考える若者まで、幅は広いが子どもや若者をテーマとした事業だったので、明るい未来を担う人たちを支える内容で、明るい発表だったと感じた。一方で、シニアも支えて欲しいとも感じたので、そういった提案も今後あると良いと思う。

また、まちづくりではシビックプライドという言葉が定着している。自分の街にプライド持つ、愛着プラスプライドということだと思う。後半2つは川崎の歴史に着目して、そこからプライドを持っていくということだったと思う。今、神楽坂のまちづくりに携わっていて、神楽坂は芸者がいる街ということが1つのプライドになっている。芸者がいるからこそ石畳の街ができて、景観が素晴らしいというところが1つのプライドになっている。芸能という目に見えないものが街にも反映されていて、そこが街を好きになるポイントになっている。川崎にも旧東海道という目に見えるものもあるが、目に見えないような文化や歴史というのが形になって、それが愛着につながっていく。このような取り組みはすぐには成果が見えてこないかもしれないが、川崎区のイメージはだんだん上がってきていると思う。前は川崎区は工業地帯というイメージ

があったと思うが、今はマンションも建ち、若い人たちも多くいて、ブランド価値が上がっていると思うので、皆さんの力で、愛着、シビックプライドを持てる街になっていけば良いと思う。